有郭乳頭内に現れたる Epithelial pearl に就て

九州歯科大学組織学教室 (主任 三枝 博教授)

三 枝 博、島 村 昭 辰、中 島 孝

歯牙発生時、間葉組織内に残存した歯堤が退化分散し、一部は恰も Hertwig 上皮鞘の末路の如く、上皮細胞群 (上皮索) となり、あるものは球状のいわゆる Epithelial Pearls を生ずることは内外の成書に見られることである。

かかる Epithelial Pearl (以下 E. P と略す) に関しては、口蓋縫線部、口蓋扁桃腺、稀には有郭乳頭溝の上皮内に E. P 様のものが認められると Bergengrün²⁾ Epstein¹⁰⁾、Mummery⁵⁾、Maximow¹¹⁾、中山、関戸¹⁾ 等が報告している。然し有郭乳頭内に於ける E. P についての報告には接してない。

ここに於いて著者等は人胎児口腔周辺の発生過程を追及中、たまたま有郭乳頭内に E. P を見出したのでその概要を報告する。尚附随して口蓋扁桃腺の E. P についても合せて簡単に報告する。

材料は胎生 2 カ月から 10 カ月に至る各月の人胎児 18 例の口腔周辺にして Formalin 固定、法に従って Celloidin 包埋、連続切片調製、Hämatoxylin-Eosin 重染色を施したものである。

所 見

有郭乳頭内に於ける E. P

8 カ月までの胎児有郭乳頭内には全然その徴候を認めなかったが、9、10 カ月胎児の該乳頭の固有層に E. P を認めた。殊に 9 カ月胎児に於けるものは前後径 510μ 最大幅径 430μ の可成り大きいもので、該乳頭の約 $\frac{1}{2}$ 以上を占めている。併し 10 カ月に於けるものは既に退化萎縮傾向を示していた。

扁桃腺に於ける E. P

既に中山等が記載している如く著者等は 5 カ月胎児の口蓋扁桃腺内に上皮細胞の集密像たる E. P の初期像を認め、7 カ月胎児に於ては E. P としての明確な像を片側 5~7 コ認めた。(図 3)

E. P の組織像 は図 1 (中央部断面) に示す如く、

外周は密に配列する 1~2 層 (乳頭のもの)、或いは 4~6 (口蓋扁桃腺) の短柱状及び幾らか扁平化した上皮細胞に包まれ、その内層は著しく扁平な細胞が同心円の数層配列している (一部は既に崩壊像を現す) が、漸次内方に進むに従い核は散在的になり更に中心部に至れば消失し、角化している。併しいわゆるカニ状を現わしている部もある。

考 按

E. P の成因 に就て最近の有力な説に依れば、上皮の退縮の現象の見られる場所の Epithelreste が、何等かの圧迫によって E. P が形成されるという。これに関し中山、関戸等は例を挙げ、扁桃腺内の E. P については陰窩形成時、粘膜上皮の残存せる上皮索が Lymph 浸潤の圧迫に原因し該腺内に E. P を形成したものであり、又有郭乳頭溝の上皮内に於ける E. P 様のものに就いても同様の見解を述べている。

前記した如く有郭乳頭内に見出した E. P の発生原因に就ては著者等も本説に同意するもので、該乳頭の場合も輪状溝形成時、舌粘膜上皮の陥没異常に対し該乳頭發育の圧迫が原因したものと推察する。

結 論

1. 9、10 カ月胎児の有郭乳頭固有層内に E. P を見出した。特に 9 カ月胎児に於ける E. P の前後径は 510μ 、最大幅径は 430μ である。
2. 5 カ月胎児の口蓋扁桃腺内に E. P の初期像 (残存する上皮群) を認め、7 カ月胎児に完成した E. P 像を認めた。
3. 組織像 (中央部断面)、外周は 1~2 層 (乳頭内のもの) 或いは 4~6 層 (扁桃腺内のもの) の上皮細胞に近似した短柱状及び幾らか扁平の細胞に取巻かれ、その内層はより扁平な細胞が数層同心円状配列更に内層に至れば核は点散し、中心に近い所では既に消失し胞体は角化している。尚一部には破壊されたい

わゆる糜爛化している。

文 献

- 1) 中山知雄、関戸一三：胎児及び新生児の口腔粘膜及びその附近に於ける Epithelperlen に就て解剖誌、Vol. 27、No. 3、147~153、1952
- 2) Bergengrün, P.: Arch. f. Entw. Mech., 28: 277~326、1909
- 3) Jassowin, G.: Anat. Anz., 67: 381~387、1929
- 4) Beneke, R.: virchows Arch., 149、95、1897
- 5) Mummery, J. H.: Dental Cosmos 64:

275~282、1922

- 6) Peter, K.: Deutsche med. Wschr.: 649~650、1914
- 7) Rauber-Kopsch.: Lehrb. u. Atlasd. Anat. d. Menschen 16 Aufl. 2: 58、1941
- 8) 谷 博、河野博太郎：日本医誌11、1952
- 9) Roux, W.: Arch. f. Entw. Mech. 3、1896
- 10) Epstein, A.: Zeitschr. f. Heilk., 1: 59~94、1880
- 11) Maximow, A. A a. Bloom, W: A Textbook of Histology. 5th. ed : 382、1949

Fig. 1 the epithelial pearl appearing in the P. vallatae of human embryo (9 month old) 5×10

Fig. 3 the epithelial pearl appearing in the Tonsilla palatina 5×10

Fig. 2 a two hundred times enlarged Fig. 1

ON THE EPITHELIAL PEARL APPEARING IN THE P. VALLATAE OF HUMAN EMBRYO

by

H. Saegusa, A. Shimamura, T. Nakashima.

Department of Histology, Kyushu Dental College

(Director, Prof. H.Saegusa)

During the course of the study on the developmental process of oral cavity in the human embryo, the authors found unexpectedly an epithelial pearl appearing in the Lamina propria of P. vallatae in the human embryo 9 and 10 months old. The results were summarized as follows.

1) The epithelial pearl in the 9 month embryo showed the typical features with its longitudinal diameter of 510 micron, and its width of 430 micron.

2) On the histological finding of the epithelial pearl.

The outer layer consisted of one or two layers of columnar epithelial cells, and within it, there appeared a concentric circle of very thin squamous cell layer, and a part the center is degenerated to horny or corneous layer with scattering nuclei, and another part to the so-called chylous condition.